

# 儀同三司母貴子について

大 知 富 由 美

目 次

はじめに

第一章 生い立ちと宮仕え

第二章 貴子の人柄

第三章 結婚生活

第四章 中閔白家の没落

第五章 貴子の死

おわりに

はじめに

忘れじの行末まではかたければ

今日を限の命ともがな(新古今集十三)

この歌は、儀同三司母、高階貴子の歌の中でも最も人口に膾炙しているものである。百人一首にもとられているので何となく身近に感じられる歌でもある。

詞書には、

中閔白通ひそめ侍りける頃

とあり、愛を誓う道隆に、コケティッシュな中にも厳しく切り返しているあたり、理知的で才気あふれる若き日の貴子を想像させる。しかし皮肉なことに、彼女の一生に対してこの歌は非常に暗示的であった。

拾遺集十八に、

中納言平惟仲久しうありて消息して侍りける返事にかゝせ侍りける

の詞書で収められている、

ゆめとのみ思ひなりにし世の中を

なに今更に驚るかすらむ

という歌には、「忘れじ」の歌や、栄花物語に、

女なれど、真字などいとよく書きければ内侍になさせ給ひて、高

内侍とぞいひける(さまざまのよろこび)

といわれた才気煥発な貴子の面影は既に無く、悲歎にくれるあまりに心を閉ざしてしまったような、一人の老いた女性がいるだけである。

人臣の位を極めた夫や、美しい娘や、立派な子息を持ち、受領階

級出身の女性として最高の幸せを得たのも束の間、このような哀切極まらない歌を詠むまでになったその人生の変転は、全く悲劇的というほかは無い。

私は、王朝の女性の持つ悲劇性を象徴するような人生を送った貴子について関心を持ち、研究することにした。

## 第一章 生い立ちと宮仕え

貴子の生まれた年は、記録が無くはつきりしていない。二男の隆家が配流地から朝廷に提出した、母の病氣見舞と自らの病氣治療の為に帰京を請う奏状が、『本朝文粹』巻七に載っている。貴子が亡くなる少し前に提出されたもので、実際は祖父高階成忠の代作であったが、この奏状では、貴子を「六旬の老母」と表現している。

これについて小澤正夫氏は、  
漢文式の修辭であつて、實際は五十才くらいであつたらう。  
と推定しておられる。(注1)

また西木忠一氏もそれに賛成して、

とすると、長子伊周の出生した天延二年は、高内侍の二十八才となり、彼女の生年は、天曆元年(九四七)と推定され、高内侍は夫道隆より約六才の年長であつたと考えられるのである。

と述べておられる。(注2)

他には、天曆五年から九年の間に貴子の出生を推算する説もある(注3)。この説によると貴子は道隆より一、二才上か下といったところである。

ところで、貴子の実家高階家は天武天皇の孫で左大臣であつた長屋王から出た家系で、承和二年に左中弁峯緒が高階真人姓を賜っている。貴子の父成忠は、一条天皇の侍読・東宮学士を勤めた碩学で、才深う人に煩しとおぼえたる人(栄花物語)

であつた。貴子はその成忠に、

男子子どもあまたありける、女のあるが中にいみじうかしづき思ひたりけるを(栄花物語)

と大事に育てられた娘であつた。その理由としては、聡明であつたことや、子女の美しさなどからみて母である貴子も美しかったことなどが考えられると思う。

成忠は貴子に夫を持たせようとも考えたが男の心は測り難いことから、円融帝の宮中に出仕させた。彼女の宮仕え時代について、さきにも引用したが、栄花物語(さまざまのよろこび)に

女なれど、真名などいよく書きければ内侍になさせ給ひて高内侍とぞいひける

とあり、大鏡には、

それはまことしき文者にて、御前の作文には文奉られしはとよ。少々の男にはまさりてこそ聞えはべりしか。

とあつて、美しいだけでは無く漢才のある女性として重く用いられたことや、その才が世に喧伝されていたことがわかる。彼女の才は漢詩文だけでなく和歌の面でも優れていて、勅撰和歌集に五首が入集している。

その貴子がいづ頃宮仕えを退いたかについて確かな資料は無い。

浜口俊裕氏は、

円融朝で兼家道隆親子は全く不振であったし、天延二年から永観年間に至る十一年間に貴子は三男四女七人の妊娠と、出産を繰り返し、掌侍の職掌を十分に果し得なかつた、

であろうことと、通例四人の掌侍にしても円融朝末から花山朝には四人の掌侍が在任を確認され貴子のポストがないように思えることから、

貴子が円融朝に掌侍として出仕したといつても、それは天元二年の隆家出生もしくは翌三年の隆円出生までのことで、以後は名目だけの掌侍か或いは円融朝末頃には従五位上で掌侍を辞したのではないかと想像される。

と結論しておられる。(注3)

貴子は長子伊周の生まれた天延二年より少し以前に宮中で道隆と知り合い、その才知と美しさによって、

人よりことに心ざしありておぼされければ(栄花物語)  
と、特に愛されるようになっていったものと思われる。

## 第二章 貴子の人柄

前述のように貴子は父成忠に大事にかしづき育てられた娘であった。そしてさして名家の出ではなかつたが、円融天皇の宮中に出仕すると才学から内侍に任命された。

浜口俊裕氏は、

内侍(掌侍)はその多くが権掌侍から転じたが、目下のところ貴子が権掌侍であつた記録も無く、『尊卑分脈』(第一編道隆公孫)

には伊周の母に関し「贈従三前掌侍貴子」とあるから貴子は一掌に掌侍に任用されたものと思われる。

といつておられ(注3)、そうだとすると貴子の才はかなりのものであり、内心の自負心もかなりのものであつたと思われる。

加えて藤原氏の、容貌も性格も端麗で、魅力的な人物であつた道隆に、多くの女性達の中でも、ことに愛され、優れた子供達を産んだことは、女性として非常に誇らしいことだつたらうから、気位もかなりのものだつたらう。

また、宮中で内侍として仕えたのだから、人交らいなどにも長じていただらう。

高い見識と誇りを持ちながらお姫様育ちでないしつかりした一面もあつた。

殿の有様、北の方など宮仕にならひ給へれば、いたう奥深なる事をばいとわろきものにおぼして、今めかしうけ近かき御有様なり(さまざまのよろこび)

という栄花物語の記事からは、明るく華やかな一面もうかがえる。その性格の聡さや魅力は、中宮定子の御性格によく投影しているように思われる。

貴子はまた大鏡に、

さやうの折、(詩宴など) 召しありけるにも、台盤所の方よりはまゐりたまはで、上の御局の方より通りて二間になむさぶらひたまひけるこそうけたまはりしか。古体に侍りや。

と評されている。中宮の母ながら、女官の立場を崩さない、昔氣質で律気な貴子の姿である。また枕草子「淑景舎春宮にまゐりた

まふほどのことなど」の段には、貴子の姿がこのように描かれている。

上は、白き御衣ども、紅の張りたる二つばかり、女房の装なめりひきかけて

この貴子の姿について萩谷朴氏は、貴子が、有職故実に明るかったことは云うまでもあるまい。ということから、

まして高内侍ほどの人が、その用意もなく参内して、中宮の女房から裳を借着して間にあわせたとすることは考えられない。要するに「女房の装なめり」という推量表現は、「中宮のお母様だけれど、裳をおつけになったのは、女房としての装というわけなのだろう」と、著装の理由に対する推量であると解すべきである。といっておられる(注4)。ここにも有職故実に明るく、娘に対しても節度を忘れない理性的な横顔が伺える。

枕草子にはこれと類似した記事がもう一つ積善寺供養の段に見える。

みな御裳・御唐衣、御匣殿までに、着たまへり。殿の上は、裳の上に小袿を着たまへる。

「絵に描いたるやうなる御さまともかな。今一前は、今日は、人々しかめるは。」

と申したまふ。

「三位の君、宮の御裳脱がせたまへ。この中の主君には、わが君こそおはしませ。御棧敷の前に陣据急させたまへる、おほろけのことかは。」

とてうち泣かせたまふ。

中宮や御匣殿までが、裳唐衣をつけた礼装でいるのに、貴子が小袿に裳という略式礼装でいた為に、道隆に冗談に紛らせて咎められたのである。

大鏡などにみえる謙虚な貴子像と相反するような内容である。これについて、私は、積善寺供養という中関白家の栄華の頂点の時に、貴子の細かい配慮にもゆるみが生じたのではないかと思う。日頃の物事をわきまえた律気な態度は、元からの性質というより、貴子の見識と洞察力によるものではないかと思うからである。

賢明な貴子は、今を時めく伊周、隆家兄弟の傲慢でやや浅薄な行動や、父高階成忠や兄妹達の、中関白家の威を借りた繁栄が、この人人のいたう世にあひて掟て仕うまつる事をぞ、人安らからずもと、やむことなからむ御なからひを、心ゆかず申し思へり。

(栄花物語)

と世人の反感をかっている事を察知していたと思う。だから、そしりを受ける事の無いように、注意深く振舞っていたのではないだろうか。気がゆるんだということとは、それだけ幸福にひたっていたのだともいえよう。

父の成忠もその日、

さて積善寺の供養の日は、この入道殿の上にさぶらはれしは、いとめだうなりしわざかな。(大鏡)

と世人に批判されるような行動をとっている。

貴子の洞察力や伶俐さは、清少納言に、上も、渡りたまへり。御几帳引き寄せてあたらしうまゐりたる人

々には見えたまはねば、いぶせき心ちす。(枕草子積善寺供養)

との感想を持たせるような、やすやすと新参ものに気を許さない用心深さ、気位の高さとなって表出したりもした。

榮花物語には、貴子に道心があったことも描かれている。

北の方(もと)より道心いみじうおはして、常に經を読み給ひ、

山山寺の僧どもをたづね問はせ給へば、あはれに嬉しき事に申し思へり。

この道心も、貴子の仏教に対する理解もさることながら、鋭い洞察力が、現在の、光輝くばかりの幸せから微かな不安を感じとつてのことではないかと思われる。

以上のように見てくると、貴子の人柄は、自負心があつて誇り高く、また宮中に仕えていただけに明るく華やかな、現代的なところもある。しかし、自分の立場を冷静に分析し、わきまえて律気で昔風に振舞つてみせる理性もある人だつたといえると思う。

だが、母としての貴子は、常に理性的であつたわけではない。枕草子「淑景舎春宮にまゐりたまふほどなど」の段で、春宮に手紙を書く淑景舎に、

上、近う寄りたまひて、もろともに書かせたてまつりしかば、と世話をやく家庭婦人としての貴子が描かれているが、母としての貴子は、子を思う闇にまどう平凡な母親であつた。日頃理性的な人であるだけに伊周、隆家が配流となつた時のとり乱し方は母の性を思わせ深い嘆きが胸に迫る。

「女のあまり才かしこきは、ものあしき。」と人の申すなるに、この内侍後にはいといみじう墮落せられにしも、その故とこそはお

ぼえしか。

と大鏡にいわれる程学問に優れた人物であつたが、学問だけで血の通わない人ではなかつたのは、榮花物語「浦々の別に」よつても明らかである。夫や子を愛する、熱い血の流れる人であつた。

### 第三章 結婚生活

中関白通ひ始めける頃夜がれして侍りけるつとめて今宵は明しがたくてこそなどいひて侍りければよめる

ひとりある人や知るらむ秋の夜を

ながしと誰か君に告げつる(後拾遺集一六)

中関白かよひそめ侍りけるころ

わすれじの行末まではかたければ

今日を限の命ともがな(新古今集一三)

この二首は、詞書にもあるように、道隆が貴子のもとに通ひ始めた頃のものである。貴子は、道隆の何人かの愛人の中でも特に愛され、やがて北の方として遇されるようになり、男女計七人を産んだ。それにより北の方としての地位を固めたかのようにであつたが、道隆の素行は相変らず放逸で、

なほ御たはれはうせざりければ、この御子どもといはれ給ふ君達あまたになり給へど(榮花物語)

といった有様だつた。

魅力的ながら浮気な夫を持つことで、貴子は女としての喜びを味わうのと同じくらい、苦しみや悲しみに身を焦がしたのであろう。

その頃の歌、

なかの関白女の許より晝に帰りに内にも入らず外にゐながら帰り  
侍りければよめる

あかつきの露は枕におきけるを

草葉のうへとなにおもひけむ(後拾遺集一二)

を見ると、絶大な幸福に恵まれていたかに見える彼女の前半生も、  
多くの王朝女性と同じように、不安や焦慮や涙で一抔の驕りをおび  
ていることがわかる。

とはいえ、道隆は貴子や貴子腹の子を殊に愛した。

なほこの嫡妻腹のをいみじきものに思ひきこえ給へる。(栄花物

語)

そして正暦元年には、長女定子が、一条天皇の後宮に入つて、

二月には内大臣殿の大姫君内へ参らせ給ふ有様、いみじうののし  
らせ給へり。

女御から中宮となり、道隆も兼家の病による出家に伴つて、関白攝  
政となり、貴子は従五位上から正三位に叙された。

こうして貴子の生涯最高の時が訪れた。家長である道隆は、  
御かたちも心もいとなまめかしく、御心ざまいとうるはしうおは  
す。(栄花物語)

御かたちぞいとときよらにおはしましたし。(大鏡)

と評されるような端麗な人物で、性格も、

斯様に人の為情々しき所おはしましたしける。(大鏡)

と人情があった。冗談好きであったことも有名である。子供たちは、  
母北の方の才などの、人よりことなりければにや、この殿の男君

達も女君達も、皆御年の程よりはいとこよなうぞおはしける。

(栄花物語)

と評される程優れていた。中宮定子は美しく、枕草子に、

宮はいとやすらかに、いますこしおとなびさせたまへる御気色の、  
紅の御衣に光あはせたまへる、「なほたぐひはいかでか」とみえ  
させたまふ。

などと繰り返し称えられている。また才気にも機知にも富んで帝寵  
をもつぱらにし、中宮サロンともいうべき高い水準の文化圏を形成  
して華やかにときめいていた。

長男の伊周は、

よろづのこと身にあまりぬる人の、御才日本には余らせたまへり  
しかば、

と大鏡に評せられる程才学があり、容貌も美しかった。次男の隆家  
は、胆力のある君達だった。

正暦四年には、次女の原子も東宮妃となりそのころの貴子の不満  
など何もないさまは、枕草子の「淑景舎春宮にまゐりたまふころな  
ど」にくわしい。直後の没落の気配など、一毫もかんじられない程  
一家全員が幸福そうである。

貴子は道隆と一つの車で参内し、中宮と春宮妃、立派な子息に囲  
まれている。

清少納言が、

大納言殿はものものしうきよげに、中将殿は、いと勞々じういづ  
れもめでたきを見たてまつるに、殿をばさるものにて、上の御宿  
世こそ、いとめでたけれ。

と称えるのももつともであった。

しかし、そんな幸福にも驕りが生じていた。

#### 第四章 中閔白家の没落

万全に見える中閔白家にも不安材料がいくつもあった。

まず、道隆が美酒飲みだったこと、そして父兼家から比較的苦勞無く閔白職を受け継いだ為に、人の心を掴むといった微妙な政治力に欠けた面があったことであった。道長が行成ら四納言といわれる側近を上手に使ったのに比べ道隆には側近らしい側近はいなかった(注5)。

道隆死後、あれ程あっけなく中閔白家が崩壊したのも、道隆一人に権力が集中していた為ではないかと思われる。道隆は側近を作り政治の基盤を整えるよりも、娘の入内による外戚閔係作りを注いでいた。側近に関しては、母の血を享けて優れた資質を持つ伊周や隆家が成長すれば自分を助けてくれるだろうと考えていたのかも知れない。そのことは定子立后や、伊周の強引な位階引き上げにあらわれている。

道隆のこの強引なやり方は度々世の不評をかった。道隆は正暦元年一月、一条天皇の後宮に定子を入れた。定子はその年のうちに女御から中宮へと進んだ。しかし既に三后(皇后遵子、皇太后詮子、太皇太后昌子内親王)があった為、この立后は世の非難を沿びることとなった。栄花物語では、定子の立后を史実の十月五日から六月一日に改変して兼家病中のこととし、道隆や高階一家の強引さを強

調している。

一族の位階引き上げも、栄花物語に、

北の方の一つ腹の、さべき国国の守どもにただなしになさせ給へり。この人人のいたう世にあひて掟て仕うまつる事をぞ人安からずもと、やむごとならむ御なからひを、心ゆかず申し思へり。

大千代君は<sup>道頼</sup>中納言になり給ひぬ。小千代君は<sup>伊周</sup>三位中将にておはしつるも、中納言になり給ひぬ。いつもたださるべき人のみこそはなり上り給ふめ。

とあるように世間の響響をかうものであった。

しかもそれは貴子腹の子や高階家にあつく、外腹の子とはいえ長男である道頼ら庶腹の子には、

大納言殿、これ(道頼)をばよそ人のやうにおぼして、小千代君を、「いかでこれ疾くなしあげん」とおぼしめしたる。(栄花物語)

花物語) 腹腹の御君達、大千代君よりほかにまだともかくもしたてまつり給はず。(栄花物語)

山の井の中納言にておはするに、小千代君宰相中将にておはするを、撰政殿心やすからずおぼして、引き越して大納言になし奉らせ給ひつ。山の井いと心憂く思ひきこえ給へり。(栄花物語)

と冷淡であった。道頼は、

御かたちいと清げに、あまりあたらしきさまして、ものより抜け出でたるやうにぞおはせし。御心ばへこそこと御はらからにも似たまはずいとよく、また、ぎれをかしくもおはせしか。(大鏡) 山の井の大納言は、入り立たぬ御兄にては、いとよくおはするぞ

かし。匂ひやかなる方はこの大納言（伊周）にもまさりたまへるものを、（枕草子九九段）

とすこぶる評判のいい人物だったから、世人の同情を集め、伊周や高階一族に批判が及びせられる一因となった。

道隆がそうまでして可愛かった伊周は、才学は確かに素晴らしかったが、政治力は無きに等しかった。それでも道隆や外祖父成忠は伊周到政権を与える為に奔走し、その強引なやり方がますます世人の反感を招くこととなった。

伊周は道隆の病をおしての必死の奏請で、道隆病中の政治を執ることとなった。しかし長徳元年貴子の看護も空しく道隆が死ぬと、中関白家の運命は、暗転した。

伊周の政治は、

いかでかみどりごのやうなる殿の世のまつりごとしたまはむ。

（大鏡）

内大臣殿は、ただ我のみよろづにまつりごちおぼいたれど、大方の世にはかなうち傾きいふ人々多かり。（栄花物語）

と不評で、それも父の忌も過ぐさず、人の衣や袴の丈の規制をしたり、一条天皇に対して大きな発言力を持つ皇太后詮子に対して、

女院は入道殿をとりわきたてまつらせたまひて、いみじう思ひまうさせたまへりしかば、帥殿はうとうとしくもてなさせたまへけり。（大鏡）

と分別の無い態度をとり、

帝、皇后宮をねんごろにときめかせたまふゆかりに、帥殿はあけくれ御前にさぶらはせたまひて、入道殿をばさらにも申さず、女

院をもよからず、ことにふれて申させたまふを、（大鏡）  
といった有様なので、詮子は不本意に思い、また、伊周のことをうとんだのだった。

詮子が関白宣下を道長に下すように運動し、世人がそれを納得したのも、もとはといえ伊周の失政や、浅はかな行為に由来するものであった。

また、中関白家が信望を失い、没落していった理由の一つに、高階家の人々の狂的な行動があった。もともと定子の強引な立后も栄花物語によると高階一族のそそのかしであるといわれた。

特に、貴子の父成忠はすさまじいばかりに政権に対する執着が強く、伊周を関白にしようとする行動には気違いじみたものがあった。

道隆が病気になる、と

この二位の新発心を感して御祈をし、いみじきことどもをす。

（栄花物語）

と道長を呪ったりし、道隆が死ぬと、

二位の新発心の御忌にも籠らで、さべき僧どもしてさまざまの御祈ども行はせて手を額にあてて昼夜祈り申す。（栄花物語）

と不気味なまでに祈禱を行い、世人の誹謗をかかった。ただでさえ高階家の人々が時流にのって栄えることを世人は苦々しく思っていたから、ますます信望を失うのもやむを得ぬことだった。

一族の位階を強引に引き上げることは兼家もしているが、道隆はその地固めが充分でないうちに死んでしまった。

また定子が道隆生存中に皇子をなすことができなかつたことも不

運であった。

道隆亡き後の中関白家の大黒柱ともいふべき伊周は、道兼から道長へと目の前を通り過ぎる関白職を手をつかねて見送り、することとしては、祈禱ばかりであった。

そして、花山院を恋敵と勘違いして、隆家と共に弓で射かけるといふ不敬事件を起こしてしまったのだ。

## 第五章 貴子の死

このことで中関白家の没落は決定的なものとなった。

中流の高階家から出て、中宮、東宮妃、内大臣らの母として、また摂政関白の夫人として誇り高く生きてきた貴子にとって信じ難いようなことが次々と起った。

中関白家は、内部からも、みるまに崩壊し始めた。その経過を栄花物語によって追ってみたいと思う。

殿の内に年ごろ曹司して候ひつる人人、「とありともかかりとも君のならばせ給はむままにこそは。」と思はで、よろづをこぼち運び、ごほめきののしりでもて出で運び騒々を見るに、いみじう心細し。されど、「まな」とも制し給ふべきにもあらず。

と、仕えている人々までも見切りをつけて、様々なものを持って逃げ出している。あれほど盛んだった中関白家の威勢も全く地に落ちてしまったのが解る。邸のまわりは恐ろしげなものたちにとりまかれ、つい最近まで中宮の里第として威厳と栄光に満ちていたのも夢のような有様だった。貴子は定子達とともに血の涙を流して泣くけ

れど、あろうことかその間にも下賤の放免達が乱入してくる。そして伊周と隆家に下された宣命が読み上げられるのだ。

「太上天皇を殺し奉らむとしたる罪一、御門の御母后を呪はせ奉りたる罪一、公家よりほかのいまだ行わざる大元の法を私にかくして行はせ給へる罪により、内大臣殿を筑紫の帥にして流し遣わす。又中納言をば出雲権守になして流し遣わす」

伊周はその後、厳しい警戒の中を、邸を脱け父の墓所、木幡に参った。検非違使は姿を隠した伊周を厳しく詮索し、中宮御所にまで踏み込んだ。小右記五月一日条によると、

夜の御殿の内を探せば、後の母あえて隠れ忍ばず。

とある。四月二十三日、伊周は帰第し、夜があけるといよいよ配所に送られることとなった。あれ程常に理性的だった貴子も声を放って泣くのだ。検非違使に促されて伊周が車に乗ろうとすると貴子は別れかねて、

母北の方やがて御腰を抱きて続きで乗らせ給へば、

「母北の方、帥の袖をつとらへて乗らむと侍り。」

と奏せさせれば、

「いとびんなきことなり。ひき放ちて。」

とあれど離れたまふべき方見えず。

和漢の詩才が世に喧伝され、常に誇り高く理性的であった貴子のなりふりかまわぬ姿には、心痛むものがある。貴子は伊周にひしとと掴ったまま、山崎関戸の院までついていった。

そこで、伊周、隆家が、それぞれ播磨と但馬にとめおかれることになったという連絡が届き、貴子は伊周に慰められ、説得されて都

に戻った。そこで見たものは、中関白家の栄華の象徴ともいふべき中宮定子の変りはてた尼姿だった。中関白家の栄光の崩壊を目のあたりにし、世の無常を痛感した思いであつたらう。

上は宮の変らせ給へるに又いとどしき御涙さくりもよよなり。

心労が積つて貴子はそのまま病の床に伏した。夫が死んでからの運命の激変は、貴子が聡明で物を考える力を持つ女性であつただけに、一層堪え難いものだったと思われる。

宮仕もしたことがあり、世間というものがある程度知つていた彼女には、世間の思惑が痛い程想像せられて、その高いプライドに、いやし難い傷を負つたことであらう。

若い頃、

忘れじの行末まではかたければ

今日を限の命ともがな

と詠んで、男の言葉の頼み難さを揶揄した貴子は、頼みになるものなど何もないことを思いしらされて、

北の方はそのままに御心地あしうて、物もまゐらで年ごろの御念誦も解怠して、あはれに口惜しき御有様を、御はらからの清照阿闍梨など明暮聞ゆれど、今はおぼしなほるやうも見えず沈み入っておはすれば、

とすつかり生きる氣力をなくしてしまった。

ただ、

この北の方は沈み入り給ひて、いと頼しげなくなりまさらせ給ふ。

ただ世と共の御言には

「殿に対面して死なむ〜。」

とぞ寝ごとにもし給ふ。

と伊周を恋しがって、寝言にも呼ぶという、子を思う母の心が胸を打つ。貴子が泣きながら詠んだという、

夜の鶴都のうちにこめられて

子を恋ひつつも泣きあかすかな

の歌は詞花集雜上に、

帥前内大臣明石に侍りける時恋ひかなしみて病になりてよめるの詞書をつけて収められている。母の悲痛な嘆きが、漆黒の闇に白く浮び上がる孤独な鶴のイメージによって哀しく詠まれていて、高い貴子の横顔をも伺わせる。

貴子の病を知って、伊周は逡巡の末入京した。伊周と貴子、中宮は、貴子がかねて目をかけていた西院というところで対面した。貴子も定子もよろこびの涙を流した。その時は貴子の容態はかなり重かつたが、

「今は心安くも死もしはべるべきかな」

と喜んだという。伊周への愛の深さが推し測られる。

その伊周入京が、密告者によって朝廷の知るところとなった。貴子は人の心の頼み難さを、尚更のように痛感したことだらう。これによつて貴子は、

母北の方あきれて、やがて物も覚え給はず。

と、ますます重体となった。

中納言平惟仲久しうありて消息して侍りける返事にかかせ侍りける。

ゆめとのみ思ひなりにし世の中を

なに今さらにおどろかすらむ

この歌は詞書にある通り、平惟仲に送ったものである。惟仲は道隆の死後、娘を一条天皇に入内された男であり、伊周を密告したといわれる(小右記) 平生昌の兄でもあった。

貴子の心は深い絶望と嘆きに閉ざされ外界を拒否して死に等しい生を生きていた。恨みも苦しみもあまりに深く激しく、心の痛みも飽和してしまい、麻痺して、何もかもが現実のように思えなかつたのかもしれない。

若い頃から才気煥発で、聡い心をもっていた貴子だけに、その最後の姿によって彼女の持つ悲劇性が一層際立っているように思う。自身が優れた才知を持っても、夫の死でこうまでなす術もなく没落していく貴子の姿は、自ら運命に対抗する術を知らず教えられもしなかつた平安女性のはかなさを象徴するものであった。

栄花物語は貴子の死を、

かくて上の御事はあさましくてやませ給ひぬ。

と結んでいる。

## 終りに

儀同三司母、貴子について研究してみても、彼女が、母として深い情愛を持っていたことを知った。また、彼女を通して平安時代の女性の悲しみや苦しみを、少しは理解できたように思う。できあがりはずつたなく、不満足で宗教が救いになっていないことなど、掘り下げたかったのだが果せなかつた。

しかし、研究中はとても楽しかった。これからも、平安時代の女性について、少しづつ勉強してゆきたいと思う。

注1 儀同三司母 小澤正夫「国文学」四巻四号

注2 高内侍一生涯と人間性に関する覚書 西本忠一

注3 清少納言の後見人高階貴子説への疑問——元輔集の三首とその

処理——浜口俊裕 日本文学研究二十号

注4 枕草子解釈の諸問題(十八) 萩谷朴

「国文学」昭和三五年三月号

注5 栄花物語・大鏡に見える中関白家 河北騰「平安文学研究」

38輯

### —参考文献—

枕草子 新潮日本古典集成 萩谷朴校注

栄花物語全注釈 松村博司 角川書店

大鏡 日本古典文学全集 橘健二 小学館

### 〔評〕

一、乏しい資料の中から、丹念に貴子関係の文献を拾い上げて、論述に根拠を与えようとした努力を多としたい。

二、すぐれた学才だけでなく、熱い血の通った内侍の人柄も見のしていない。

三、よくここまでやった——という満足感を与えてくれた論文として、高く評価したい。あなた自身としても、長い生涯の重い基点を作りえたとの実感を持ったことと信ずる。(清水文雄)